

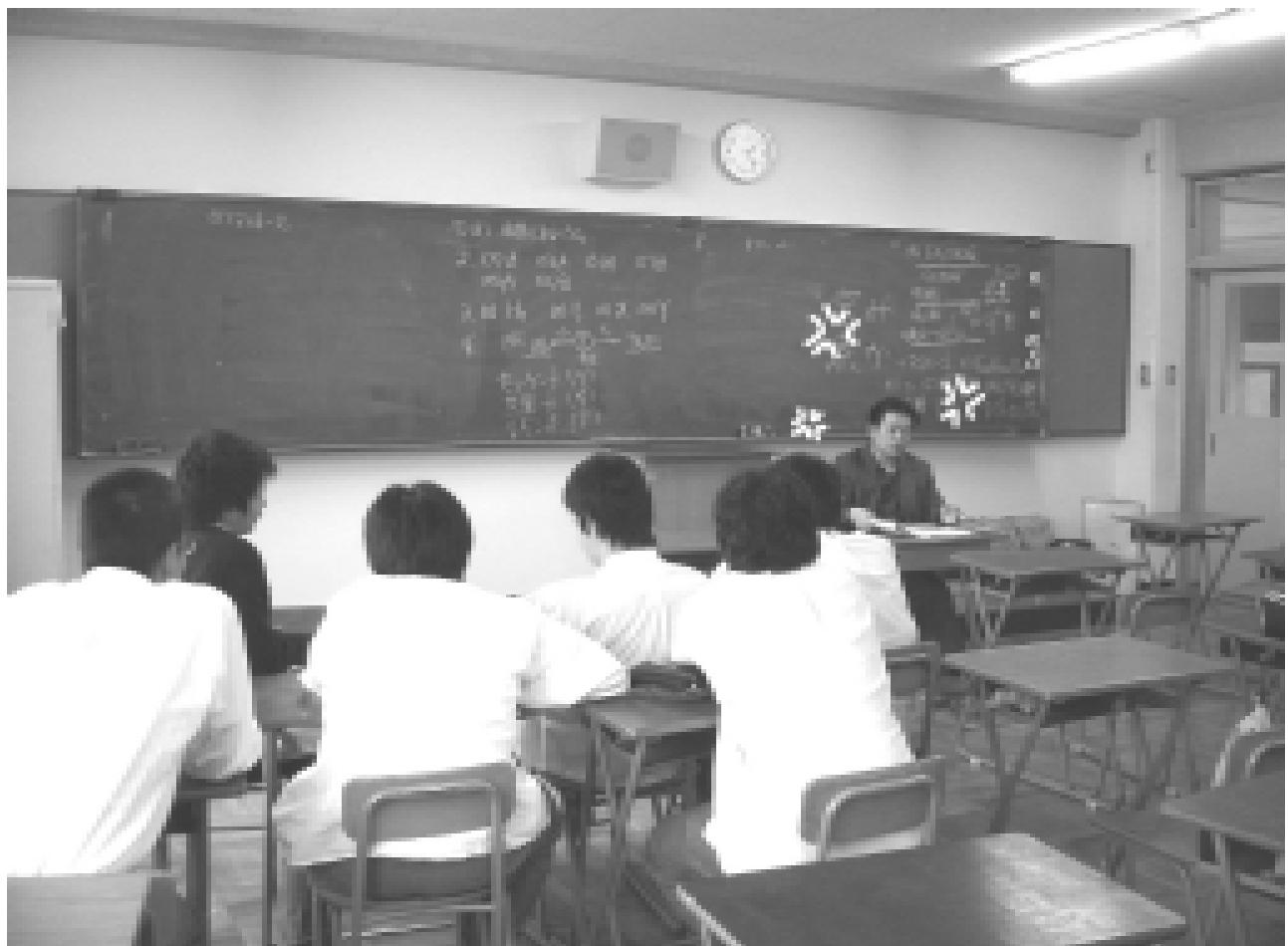


Title	「若さと老い」
Author(s)	西川, 勝
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 32-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9451
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



「若さと老い」

西川 勝

10月8日
六時間目
若さと老い

平成14年10月8日（火）
テーマ：中年看護師が語る「若さと老い」
目的：介護老人保健施設で高齢者ケアに
携わる看護師の視点から、「若さと老い」
について語ることで、受講する高校生の
自己観念に搖さぶりをかけてみたい。

教材：「考える本のはなし10」（住宅顕信の句集『未完成』
に関する書評）セイ・西川の文章、メディア出版 Neona-
tal Care 2002 vol.15 no.10 54-55 頁）

上記内容で、福井高校での授業を行つた。当初の予定では、痴呆老人ケアの話もする予定であったが取りやめた。その理由は、当時の高校生の授業態度に腹を立てたぼくが、話をすら氣を失つてしまつたからである。ぼくは、職場の同僚である介護福祉士の重信さんと一緒に授業を計画したのだが、重信さんが何日もかけて練つた「寝返りの援助」という実習授業をまったく真面目に受けようとしない彼・彼女たちを見て、ぼくはまさに「ぶちきれ」の状態になつてしまつていたのだ。実習ベッドに勝手に寝転がり、奇声を上げたり、生徒同士がふざけあう。授業中も、肩から鞄を下ろそうともせず、携帯電話をもてあそぶ姿。講師の話なんか聞く素振りすらみせずに雑談する連中に、怒鳴りつけたくなるのを

押さえて、視線をきつくするだけで辛抱して「いたのだが、怒りで自分の口の中がカラカラになつていいのが止められなかつた。50分の授業がむやみに長かつた。

授業の後、「どうして、生徒に注意しなかつたんだ」と、重信さんに八つ当たりするほど、ぼくの攻撃性は高まつていた。

ぼくは、授業で開口一番「君、喧嘩を売られたことがあるか」と問い合わせ、のらくら返事する男子生徒に向かつて「ぼくは、今、そんな気分なんだよ」と睨み付ける。教室の雰囲気が氣まずく凍り始める。「さまあみる。お前たちの好きなようには、させないぞ」と思った。

とにかく、授業中の私語は禁止した。すぐに何人かが机にうつ伏せになつた。途中、何度か、寝た振りして生徒のところへ行き起こしてみると、わざとらしに寝ぼけ顔でこちらを見て、特に反抗するでもない無気力な様子に、心底、こっちのやる気は失せた。彼らの作戦勝ちといつといふだろ。殴つて起こすわけにもいかないので、怒氣を含んだ声で授業を続けるしかなかつた。どんな風に話したのかは、正直言つて、もう覚えていない。ただ、住宅顕信という25歳で不遇のうちに夭折した自由律の俳人の話で、若さの栄光と惨めさを伝えようとした。顕信の句を少し紹介する。

「鬼とは私のことか豆がまかれる」「ずぶぬれて犬ころ」「若さとはこんな淋しい春なのか」「捨てられた人形がみせたからくじ

若さに特有の反抗、虚栄と傲慢、自意識。

燃えさかる炎とならずとも、せめて火花を散らす覚悟が、君たちにはないのか。ぼくは、本当に腹が立つていた。

授業の最後にこう言い捨てた。若さについて語る中年であるぼくは、決して君たちと対等でありたくもないし、理解されたいとも思わなかつた。こんな出会いもあるんだ、といふことだけは覚えておきなさい」大人に反抗していたはずの自分が、若さに反抗している。ぼくも立派な中年になつた。

しかし、久しぶりに憤激した時間を手に入れることができた。感謝しますよ。福井高校の諸君。（にしかわまさる 介護老人保健施設ニコーライアフガラシア 看護師）